



**Original Story** アトリエかぐや  
[Berkshire Yorkshire]

**Novelization** 岡田留奈

**Original Illustration** Chocochip

#### ■CGの使用について

本文下部スペースで使用しているCGは原則として原作ゲームのものを使用していますが、原作にない場面等ではハーヴェスト出版所有のCGまたはフリー素材から転用する場合があります。また便宜上、原作とは異なる場面での使われ方をしている場合があります。あらかじめご了承ください。

プロローグ 5

第1章 33

第2章 75

第3章 107

第4章 147

第5章 173

エピローグ 211

## プロローグ

俺の日課は、「おめざめテレビ」の星占いと「クローズアップ朝！」の血液型占いをチェックすること。

どちらも朝のBGM代わりに流しているテレビ番組で、最後に占いコーナーが出てくるのだ。別に占いなんて信じているわけではないが、いいことが書いてあればなんとなく気分も上がるし、悪いことが書いてあれば極力気にしないようにする。ただ問題なのは、血液型占いの内容がよくても星占いの内容が悪かったりする日。果たして今日はいい日なのか、それとも悪い日なのか？ どっちかはっきりしてくれよ、などと些末な問題を抱えながらその日の俺はバスに揺られていた。

事件は、バスに乗り込んでから十五分後に起こった。

車内アナウンスが次の停留所を告げた時、俺は降車ボタンへと手を伸ばした。目的地は「夏川町六丁目」にある夏川東病院。俺が来週から一ヶ月間、研修医としてお世話になる病院だった。

「う……うわあああっ!?!」



ボタンを押そうとした瞬間、突然大きなブレーキ音がした。バスが急停車した衝撃によつて身体が前につんのめり、そのまま倒れ込んでしまう。

顔を激しく床に打ちつけた。……と思いきや、何かがクッション代わりとなって俺の顔を受け止める。

ほよよん、と柔らかな感触。その時の俺は、自分が女の人の胸に顔を埋めているだなんて想像もしなかったのだ。

「もしもーし？ いつまで触ってるんですかー？」

「……え？」

顔を上げると、そこにはやたらとかわいいお姉さんがいた。さらさらの長い髪に、くつきりとした大きな瞳。長いまつげを何度かしばたたかせ、呆れたような顔で俺を凝視している。

思わず、見惚れた。

少なくとも俺の周りにはいないタイプ。美人だけどツンツンとしたところがなくて、親しみやすい雰囲気を持っている人だった。

こんな人と一緒に医大生活を過ごせたら、どんなに楽しかっただろう？ ……などとまったく関係のないことをぼんやり考えていると、

「あの一？ 聞こえますかー？」



「……あ、す、すみません！」

俺ははっと我に返り、その豊富な胸から顔を離した。

やべっ、お姉さんの胸をクッション代わりにしてしまった！ 不可抗力とはいえ、なんてことをしてしまったんだ！

「違うんです、こ、これは、その、わざとじゃなくて！」

「うん。それはわかってるけど……」

彼女は俺を責めもせず、続けた。

「でも今の音、なんだったんでしょ？」

そういえば、と俺は周囲を見渡した。渋滞しているわけでも赤信号なわけでもないのに、道路の真ん中でバスが止まっている。前方を見ると、乗用車が不自然な角度でバスの車体に食い込んでいた。

「事故、ですかね」

「そうみたい。見たところ、大した事故じゃなさそうだけど……いたっ」

その時、彼女は苦悶の表情を浮かべて足首を押さえた。

俺も慌てて、彼女の足を見やる。ミニスカートから伸びた、その艶やかで肉感的な足を。

「ど、どうしました？」

「その、足を挫いたみたいで……」



「えっ」

事故の衝撃で、俺が彼女にぶつかってしまったせいだろうか。その場にしゃがみ込み、患部と思わしき箇所を見る。これでも俺は医者タマゴだ。触診すれば、だいたいの症状はわかるのだ。

「すみません、ちょっと触りますんで、痛かったら言ってください」

綺麗な足だからといって、そこにやましい気持ちなど、もちろんない。

「……あつ」

足首に触れると、彼女の口から小さな声が漏れた。やはり、かなり痛むのだろうか。今度は少し場所をずらして、円を描くようにさすってみる。

「ここはどうですか？」

「んあ……ああ、そ、そこ……」

「……………?」

びくびく、と彼女の身体が反応する。その声が妙に悩ましく聞こえてしまうのは気のせいか。

いやいやいや、俺はなにを考えているのだ。俺は医者タマゴで、相手は怪我人だ。よけいなことは考えなくていいんだって。

「骨には異常なみたくないんで、やっぱり捻挫ですかね。歩けますか？」



「う、うん、だいじょう……あつ！」

言ったそばからバランスを崩し、倒れそうになる。俺は立ち上がり、その身体をすかさず支えに回った。

図らずも、彼女が俺に抱きつくような格好になる。

ふわ、とフローラル系の香りが漂った。彼女のやわらかい雰囲気にとてもよく似合った、シャンプーの香りだ。

「だ、だだ、大丈夫ですか？」

「あはは……ありがと。平気平気」

そうは言いつつ、ちっとも平気じゃなさそうで、俺はひとまず彼女の手を取ってバスを降りることにした。衝突事故に遭ったのは明白だし、このまま車内においても一生目的地にはたどり着かない。

しかし、今日はツイてない一日だ。やはり「おめざめテレビ」の星占いは正しかった。だいたい、血液型占いなんて怪しいことこの上ない。わずか4パターンの血液型で人の運勢など決められるものか。まあ俺がお姉さんのおかげで無傷で済んだのは、不幸中の幸いだっただのかもしれないけど。

バスから降りると、すぐに救急車のサイレンが聞こえてきた。

ぶつかった乗用車を見ると、完全にバンパーの部分がひしゃげていた。被害は決して



軽くないが、運転手に目立った外傷はない。首を押さえているところを見ると、ムチウチぐらいは食らったのだろうか？ 楽観はできないが、ひとまずはその程度で済んでよかったと見るべきだ。

「あなたも、とりあえず病院に行った方がいいですよ。この近くに、夏川東病院っていうのがあるんですけど……」

「い、いいっ！ 大丈夫！ わたしは大丈夫だから！」

彼女はぶんぶんと首を振って俺の提案を拒んだ。

「でも、捻挫は悪化させるとクセになるんですよ？ 実は骨折よりもタチが悪かったりするんですが」

「それでも、大丈夫！ あんなとここに担ぎ込まれたら、恥ずかしいっていうか……明日からどうすれば……」

「？」

彼女は困惑した様子で、なにやらぶつぶつとつぶやいている。病院に行きたくない理由でもあるのだろうか？ でも、そこまでツッコむのも不粹というか、嫌がる人に無理強いはできない。

「とにかく、心配してくれてありがとう。わたしの家すぐ近くだし、帰って寝てればすぐ治るから」



「でも……」

にっこりと笑ってみせる彼女だったが、やはり心配だった。それに、原因の一旦は俺自身にもあるのだ。

「じゃあ、こうしましょう。俺が家まで送りますから、背中に乗ってください」

「え……？」

俺は彼女の前にしゃがみ、背中を向けた。紳士としては、せめてこれぐらいの罪滅ぼしはするべきだ。

「おぶっていきますよ。家、近くなんでしょう？」

「で、でも……」

「それが嫌なら、無理にでも病院に連れて行きます」

「ふえええつ、そ、それだけは勘弁してえっ！」

彼女は語気を強めた。冗談で言ったつもりなのだが、本気でビビっているようだ。

「だったら、おとなしく背中に乗ってもらえませんか？ 家に帰って応急処置だけでもしないと、せつかくの綺麗な足が台無しになっちゃうかもしれないよ」

「綺麗な、足……？」

うわずったような声が聞こえた。

「えっと、なんていうか、大腿二頭筋から腓腹筋へのバランスが美しいというか、ヒラ



メ筋が適度に引き締まっているというか、つまりフラミンゴみたいな……」

「……フラミンゴ？」

声にいぶかしげな色が含まれる。ああもう、俺はさっきからなにを言っているのだ。女っ気のない生活が長かったから、美人を前にすると単純に緊張してしまう。うまい褒め言葉の一つもスマートに出てきやしない。

「と、とりあえず、ほら！ 早く乗ってください」

ごまかすように言った。冷静に考えれば、偉そうに命令できる立場でもなんでもない俺。つーか、見ず知らずの男の背中なんか普通乗らないだろ。行きがかり上とはいえ、どう考えても怪しすぎる。

しかし彼女は、俺の肩に手を置いた。いい匂いのする長い髪が、ふわっと俺の首にかかる。どくん、と胸が高鳴る。

「じゃあおぶってもらう前に、あなたのお名前を聞こうかな。これから跨る人の名前も知らないなんて、なんだか失礼な話でしょ？」

「俺の名前は……長山功です」

「功くんっていうのね？ ふふ、かわいい名前」

そんなことを言われたのは初めてだ。でも彼女が俺の名前を口にすると、なんだかとても素晴らしいものに聞こえてくる。



「わたしは、恩田水樹おんだみずきっていうの。よろしくね」

おんだ、みずき。

彼女の名前が、胸の中にとんと降りてきた。

やがてその名前は波紋となって広がり、心がざわめくような、浮き足立つような、なにか新しいことが始まるような、そんな響きを俺にもたらしたのだった。

ふにつ。ふにふにつ。

「あ、そのこのコンビニの角を曲がって。そうそう、左ねー」

ふにふにつ。むにゅっ。

「ほら、マンションが見えるでしょ？ わたしの家、そこなの」

「は、はい」

深呼吸して、どうにかよこしまな感情を鎮める。が、深呼吸程度で収まるような、そんななまやさしいものではないのだ、これは。

単刀直入に表現すると、俺は今、半勃起状態で恩田さんの家まで歩いている。豊かな乳房を背中にぎゅむつと押し付けられているからだ。

それにしても、なんて柔らかいんだ。でもって、デカイ。これを直に触ったら、一体



どんな気分になるんだろう。

目指している職業柄、女性の裸なんて別段珍しいものでもない。乳房を見たり触ったりするだけで勃起したら医者なんて仕事は勤まらない。と、なんとか自分の理性を確認しつつ、俺たちは恩田さんの部屋に到着した。とても小綺麗なマンシヨンの一室だった。

「ありがとう。おぶってもらっちゃった上に、部屋まで送ってくれて」

「い、いえ。もとはといえば俺のせいでもありますし。それじゃ……」

「待って！」

彼女を下ろして退散しようとする、ぐっと腕をつかまれた。

「足、怪我してない？」

「へ？」

彼女の視線が、俺の膝あたりで留まる。その箇所をよく見てみると、ズボンにうつつらと血が滲じんでいた。

「あれ？ いつのまに……」

「どこかにつけたりしなかった？」

そういわれてみると、バスが急ブレーキをかけた時、ポールか座席に膝をひどく打ちつけたような記憶があった。だがそんな痛みも、倒れかけた俺を受け止めてくれた彼女の胸のやわらかさで、すべて失念してしまっていた。



「ちょっと失礼しますねー」

彼女は足下にしゃがみ込み、有無を言わさぬ手つきで俺のズボンをまくり上げた。意外に激しく擦り剥いていたらしく、患部が外気にあたってヒリヒリする。

「あ、やっぱり……ん、よし！ 手当しましょう」

「えっ、いいですいいです、ただのかすり傷ですから！」

「ただのかすり傷を馬鹿にしちゃダメよ。だいじょーぶ、わたしにまかせて。こういうの、けっこう得意なんだから♪」

「で、でも……」

傷の手当てなら俺だって得意だ。でも恩田さんはやる気満々の顔で、俺の腕をぐいぐいと引っ張ってくる。

「はいはい、部屋に入ってくださいいな。ほら、急いで手当しないと化膿しちゃうよ？」

無防備な笑顔だった。って、いいの？ 部屋に入れと簡単に言うが、もし俺がヤバイ男だったらどうするつもりなんだろう？ あまりにも気さくすぎる振る舞いに、俺の方が心配になってしまう。

なんてあれこれ考えながらも、結局はお言葉に甘えてリビングに通されてしまう俺。我ながらずうずうしい。でもでも、断る理由なんか特にないわけ。

「散らかってごめんね。そこに座っててくれる？」



「は、はあ」

本人は散らかっていると言うが、リビングは実に綺麗に片付いていた。女性の部屋らしい、シンプルで清潔感のあるインテリア。センスよく配置された観葉植物。一人暮らしにしてはけっこう広い部屋だ。

俺が住んでいる部屋とは、もちろん、なにもかもが違う。ここはなんだかい匂いがあるし、空気も綺麗だ。少なくとも汗臭かったり埃ほこりっぽかったり、ひからびたミカンの皮がそこらへんに落ちていようようなことはない。

だんだんと緊張感が増してくる。膝の痛みなんてどこ吹く風だ。研修先の下見目的でこの街にやって来たはずなのに、そんな用事はとくに忘却の彼方だった。

「じゃあ、まずズボンを脱いじゃって」

出し抜けに、恩田さんはそんなことを言い出した。

「……は？」

「ズボンについた血が染みになっちゃうでしょ？ ついでだから、一緒に洗濯してあげる」  
「い、いや、これぐらいは平気ですよ。そこまでお世話になるわけには……」

「だからー、ついでなんだってば。わたしも服を洗わなきゃいけないし、遠慮することないって♪」

そうは言われても、初対面の女性の前でズボンを脱ぐのははばかられた。……いや、



もつとはつきり言うならば、さつきから股間が半勃起状態のままなのだ。ズボンを脱いだら、間違いなくソレを公衆の面前にさらすことになる。

そんなことは、断じて許されない。つか、ただの変態だから。痴漢容疑で捕まるから。絶対。

「ほら、早く。脱ぐ脱ぐ」

「だ、ダメです！ほんとに、大丈夫ですから！」

俺は命を懸けてでもズボンを死守しなければならなかった。なのに恩田さんは、おかまいなしに俺のベルトへと手を伸ばしてくる。

「あ、もしかしてノーパン派だったり？」

「ちーがーうーっ！」

「じゃあ恥ずかしがらなくていいじゃない。悪いようにはしないってば」

「そーゆーことじゃなくてっ」

まるで生娘なまがらになったような気分。ていうか、恩田さんも俺の反応を見て絶対に楽しんでるだろ。間違いなく！

「んもう、しょーがないなあ」

小さくため息をつき、恩田さんは肩をすくめた。まるでいたずらっ子を見咎みとがめるような目で。

